

# Little Courage

水原涉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ラブライブ！第2期3話を見た後、4話を見る前に書いたツバほの小説です。

UTXでのライブを決めてから2週間の間の妄想を、なるべく本編と矛盾なく書きました。

※2014年5月1日執筆。

※Pixivより転載。

# 目次

L  
i  
t  
t  
l  
e  
  
C  
o  
u  
r  
a  
g  
e  
  
|  
  
1



## Little Courage

今、穂乃果の目の前に、一つの悩ましい問題がある。

ベッドに置いたスマホの前で腕を組み、もうかれこれ10分ほどうんうん唸っている。

ディスプレイに表示されているのは一通のメッセージ。内容はこう。

『こんばんは！ 練習はどう？ 2週間後がすごく楽しみ〇(´ー´)〇』  
差出人欄には、穂乃果が登録した名称で「ツバサさん」と書かれている。

A—R—I—S—Eのセンター、綺羅ツバサ。

2日前、UTXの屋上でライブをすると決めた際、何かあつた時のためにと連絡先を交換したのだ。

あくまで有事の際の緊急用で、雲の上の存在であるツバサから、積極的にメールが来るとは考えていなかった。

果たして、これはどういう意味なのか。

『こんばんは。順調です。私も楽しみです』

最初、そう書いて消した。いくらなんでも堅すぎる。

『こんばんは！ まあまあかな。ツバサさんは？』

次にこう書いて消した。天下の綺羅ツバサに、そっちの練習はどうなのかという質問は、失礼極まりない。

「うーん……」

めんどくさくなくなってきた。

いつもの穂乃果なら、難しいことは考えずに返事をするのだが、今回はそうもいかない。

先日UTXでのライブを即答したことで、μ'sのメンバーに怒られたのだ。

「A—R I S Eの後でライブをするなんて無謀です！ 穂乃果はメインディッシュの後に前菜が出てきて喜びますか？ どう考えたって罠です。どんなに頑張っても、A—R I S Eの後ではかすんでしまいます！」

海末にも随分な剣幕で言われたが、まあ過去のこととはしょうがない。なんだか素敵そうだと思つた自分の直感を信じたい。

ただ、μ's全員に関わることを、安易に一人で決めてはいけないと学んだ。

ツバサが自分に何気ない日常会話をしてくるとは思えない。だとすると、このメールにも何か意図があるはず。

『こんばんは！ みんなで頑張ってます！ ツバサさんにも楽しんでもらえるように頑張ります！』

まだ少し堅いけれど、「！」を3つも使ったから大丈夫だろう。緊張しながら送信する。

「はあ……」

大きく息を吐いてベッドに横になる。

あの日は気分が高揚して、言いたい放題言ってしまったが、日を置いて冷静になると、やはりみんなの憧れの綺羅ツバサと会話をするのは緊張する。

しばらくぼんやりしていると、スマホが震えた。ツバサからだ。

『高坂さんは、いつもどこで練習してるの？（\*・ー・）』

どうしてそんなことが気になるんですか？

思わずそんな言葉が頭をよぎり、意地悪くなっている自分に気が付いて首を振った。

偵察されている気がするが、A—R—I—S—Eがμ sごときを意識するのは、本来おかしい。負ける気はもちろんないけれど、それはこっちの意気込みの話であって、実力差は明白である。

『学校の屋上です。あと、神社でランニングしたりしています』

今度はすぐに送信する。

なんだろう。あの綺羅ツバサと個人的にメールをしているのに、嬉しいという気持ちが沸かない。内容のせいだろうか。嫌な緊張感だけが支配する。

『私も屋上って好き！ 開放的でいいよね (≡▽≡)』

疑問形ではなかったたので、今度のメツセージには返事をせずに、スマホを放り投げた。UTXの屋上なら、さぞ開放的だろう。

穂乃果はそこでするライブに思いを馳せた。

A—RISEの後は確かに不利かもしれない。それでも、他のスクールアイドルたちと同じような場所で、同じようなライブをするよりはずっといい。

それに、良い経験にもなるし、間近でA—RISEのライブが見られるのも嬉しい。すべてを全力で楽しみたい。

そんなことを考えていると、再びスマホが鳴った。誰だろうと思つて手に取ると、やはりツバサからだつた。

『高坂さん、練習で忙しいと思うけど、今度二人でカフェしない？ すごく美味しいチーズケーキを見つけたの！ v (\* \* — \* \* )』

「……意味がわかりません」

そうひとりごち、もう一度初めの体勢に戻る。

こつちが本題だつた。考えすぎた最初のメツセージは、偵察でもなんでもなく、ただ



の前振りだったのだ。

ツバサと二人でカフェでケーキを食べる。それはすごく嬉しいことだ。

ツバサには憧れている。ラブライブや今度の直接対決がなければ、喜んで飛び付くだろう。

けれど、ラブライブや直接対決があるからこそのお誘いだ。自分には憧れの綺羅ツバサとケーキを食べることに意味があるが、ツバサにはμsの高坂穂乃果とカフェに行く価値はまるでない。

断るべきだ。

練習で忙しいのは事実だし、実際に時間がない。今なら自然に断れる。

けれど、UTXの屋上でライブをすることと同じように、こんな機会も二度とない。ライブが終わってしまえば、ツバサとの接点もなくなるだろう。

こっちが向こうに教える以上に、こっちも相手のことを聞けばいい。それでフィフティフィフティだ。

それはメンバーへの言い訳だった。

μsという枠を外れたら、穂乃果はただのA-RISEのファンの女の子である。にこや花陽ほどではないが、穂乃果もツバサに憧れている。二人でカフェに行く想像をすると、胸が高鳴るのもまた事実だった。

『洋菓子大好きです！ 木曜日夕方か、土曜日夕方なら大丈夫です！』

後先はあまり考えずに送信する。

ツバサからの返事は、相変わらずすぐに届いた。

『洋菓子つて、高坂さん、面白い表現をするのね（\*□\*） じゃあ少し先だけど、土曜日にしましょう！』

読んでいる最中に追加でもう一通。

『あつ、このことは他のメンバーには内緒でね！ 私も二人には言わないから。A—R

ISEとか、sとか関係なくお話ししよう（\*^—^\*）』

よくわからない。

書いてあることがすべて本音とは思えない。けれど、客観的に見た時、ツバサのテンションは一貫して高い。裏表のない、純粋に楽しんでいる時の自分に似ている。

『はい、嬉しいです！』

無難なメッセージを投げて、もう一度寝転がった。

わからないことは考えない。

大丈夫。自分の選択が悪い結果に結びつくことは滅多にない。

どんな意図があつたにしろ、あの綺麗ツバサと個人的にお出かけできるのだ。可能なら二人で写メでも撮って、雪穂に自慢してやろう。

決めてしまえば楽しみになる。

μ s のメンバーには申し訳なく思いつつも、その日が来るのを心待ちにしながら、穂乃果は眠りについた。

土曜日当日、天気は上々。

待ち合わせ時間ギリギリまで練習をしていた上、急いで帰るのを訝しむ仲間たちをはぐらかしていたら、オシャレしている時間がなくなってしまった。

こんなことなら、前日に準備しておけば良かった。この辺りは反省点。

辛うじてシャワーだけ浴びて、普段着で待ち合わせ場所へ急ぐ。まあ、どうせ大した服は持っていないし、ツバサもたかが自分と会うのに、そんなに気合の入った格好はしてこないだろう。

少し遅刻をしてしまったこともあり、ツバサは先に着いていた。

肩に飾りのついた水色のワンピースに、特徴的な大きなベルトをしている。シンプルだが清楚なイメージ。

ボーイッシュな雰囲気のあるツバサだが、今日は淑やかな女の子に見える。

釣り合いは……元々取れていないから気にしないことにする。

「お、遅れてごめんなさいー！」

開口一番、まず謝った。あの綺羅ツバサが誘ってくれたのに、待たせた上、遅刻まで

してしまった。

機嫌を損ねて嫌われることまで覚悟したが、ツバサは嬉しそうに頬を緩めて笑った。「気にしないで。私も今来たところ。練習、頑張ってるのね」

相手に気をつかわせない定番のセリフ。

ますます恥ずかしくなったが、せっかくツバサが気にするなど言ってくれたので、遅刻の件は流すことにした。

「はい。今回は期間も短い上、新曲だから大変です」

「人数も多いしね。合わせるの、大変でしょう」

「そうですね。得意なことでもバラバラだし……でも、それがμ sですから！」

言ってから、ハツとなる。

今日はスクールアイドルのことは抜きで会おうと言われていたのに、思わず語ってしまった。同時に、改めて自分はμ sが好きなのだと感じた。

それがツバサにも伝わったのか、楽しそうに言った。

「いいわね。よかつたら、歩きながら聞かせて。行きましょう」

「あ、はい！」

事前に考えていたことはすべて飛んでしまった。

ツバサと一緒にいる興奮に、自分の大好きなμ sの話題が相まって、いつも以上に

饒舌に喋った。

ツバサは時々相槌を打ちながら、面白そうに聞いている。自分からはほとんど喋らない。

結局自分は相手の術中に陥ったのか、もはやわからない。ただ、共通の話題はこれしかないし、自分が話すのをやめて沈黙してしまつたら、間を繋げない。

「だから今度のライブは、衣装は3色用意して、変化を出してみようかなって思うんです！」

何かμ sに潜入したスパイが、収集した情報を報告するみたいになってきたが、だんだんどうでもよくなってきた。

先攻の上、実力上位のA—R I S Eが、μ sに合わせて何かを変えてくるとは思えない。逆は価値があるから、後から聞いてみようと思つたけれど、恐らく無理だろう。

落ち着くことなく話し続けていると、やがてツバサが足を止めて顔を上げた。穂乃果もつられて上を見る。

「この2階。美味しいけど、穴場だからあまり人はいないわ。洋菓子」

可笑しそうにツバサが言う。

雑居ビルと呼ぶほど雑然とはしていないが、小汚い印象がある。ツバサがUTXの白い制服を着て入る姿は想像できない。

「よく見つけましたね、こんなところ」

「目立たずに三人で落ち着いて話せる場所が欲しいから。色々探しているの」

こんなところにUTXの生徒がいたら余計に目立つと思ったが、すぐに意味が違うことに気が付いた。

A—R—I—S—Eを知っている層がないということだ

μ, sもスクールアイドルの中では知られてきたが、その世界から一步出ればまったく無名の存在。けれど、A—R—I—S—Eは違う。

穂乃果は、改めて今一緒にいる女の子のすごさを思った。

店内は席数が少なく、隣の席との間隔が広くて、深い赤色を基調とした落ち着いた空間になっていた。緩やかなジャズが二人を出迎える。

ツバサはチーズケーキとアイスコーヒーを、穂乃果はチーズケーキとクリームソーダを頼んだ。

ツバサが小さく笑う。

「クリームソーダって、小学生の時好きだったけど、もう長いこと飲んだことがないわ」  
バカにした様子はない。純粋に楽しそうだ。

有名人で、初対面でも少し怖いイメージがあつたが、今日はずっと笑っている。

「甘いものが好きで……」

「太らないの?」

「最近は運動してるから、なんとか。でも、油断すると危ないです」

「私もそうね」

そう言つてツバサが微笑む。太いという言葉とはかけ離れた体型をしているが、アイドルとしてその辺りも努力しているのだろうか。

「ツバサさんたちは、今度はどんな曲をやるんですか?」

緊張を誤魔化すように水を飲みながら尋ねる。

上手に主導権を握りたかったが、ツバサはいたずらっぽく笑つてそれをかわした。

「秘密。当日を楽しみにしていて」

「そうですか……」

「安心して。曲調はかぶらないわ。西木野さんの作る曲じゃないから」

そう言われて、穂乃果は恥ずかしくなった。

自分が探ろうとしていたことも、その理由も、ツバサは全部見通している。その上で、空気を悪くせず、穂乃果が満足できるぎりぎりの回答を与えてくれる。

個人戦では、この人に何一つ勝てやしない。

「ツバサさん、*μ's*のこと詳しく知ってましたけど、誰が一番好きですか?」

話を変えるために、心に浮かんだことを聞いてみる。

何気ない振りのつもりだったが、ツバサは少し驚いた顔をして、わずかに視線を逸らせた。

それからもう一度真つ直ぐ穂乃果の目を見つめて口を開く。

「もちろんあなたよ、高坂穂乃果さん」

その答えは、特に穂乃果を驚かせなかつた。聞いてから思ったが、この流れならたええそうではなくてもそう答える。

「真ん中において目立ちますもんね。でも、特に取り柄はありません」

「そんなことないわ」

ツバサが少し語調を強くする。数センチ身を乗り出して続けた。

「まず何より歌が上手。それに笑顔が綺麗。頑張ってるのが伝わってくるし、見ている人たちが元気になれる。アイドルには大事なことよ」

「そ、そうですか?」

「そうよ」

そう断言したところで、チーズケーキが運ばれてきた。

見た目ふんわりとしていて、底はパイ生地になっている。

フォークを突き刺して口に入れると、なるほどしつこくない上品な甘さが口の中に広がった。



「美味しいでしょ」

「はい」

練習で疲れていたこともあり、あつと言う前に半分平らげた。

「甘いものは食べ飽きたけど、ケーキはまた別ですね」

「そんなに食べるの？ 飽きるほど？」

「家が和菓子屋ですから」

クリームソーダをすすりながら答えると、ツバサが驚いたように眉を上げた。

それからわずかな沈黙があり、真顔でじつと穂乃果の目を見つめて低い声で言う。

「私、画面の中の、スクールアイドルのあなたのことしか知らない」

「それは私も同じです」

「穂乃果ちゃんって呼んでもいい？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

わかってからも耳を疑った。

話の流れとまるで合っていない一言に聞こえたが、ツバサの中では整合性があつたのだろうか。

混乱する穂乃果の無言を勘違いしたのか、ツバサが付け加えた。

「二人の時だけでいいわ。メールとか、こういう時だけ」

「えっと、構いませんけど」

「そう！ よかった！」

ツバサが嬉しそうに顔を綻ばせる。

完全にツバサのペースだ。ふわふわと右へ左へ飛び回り、落ち着かないよう歩いて、決してぶれない芯がある。

穂乃果が何か目論んだところで、どうこうできる相手ではない。

日本一のスクールアイドル、A—R—I—S—Eの綺羅ツバサ。魅力的なのは歌とダンスだけではない。

「ねえ、穂乃果ちゃんは兄弟はいるの？ 一人っ子？」

「妹がいます。中3で、来年UTXに入るとか言い出したけど、今は音ノ木坂を目指しています」

「あら、残念。穂乃果ちゃんの妹さんなら、きっと可愛いんでしょうね」

「とても生意気で、手を焼いています」

何気ない会話。

名前のようにキラキラと、ツバサが笑顔で喋り続ける。

店に来るまでずっと静かに穂乃果の話を聞いていたから、聞くのが好きな人なのかと思っただが、全然違った。

つかみどころがない、綺羅ツバサの魅力――

喫茶店を後にして、ビルを出るとすでに周囲は薄暗かった。

もつとも、街灯やビルの灯りは眩しくて、街は明るい。

今日はこれで終わりだろう。ツバサのことをたくさん知ることができたし、とても楽しかった。

すでに回想モードに入った穂乃果に、ツバサがやはり笑顔でこう言った。

「ねえ、穂乃果ちゃん。今日はまだ時間大丈夫？」

「えっ……？」

驚いてツバサを見る。

背丈は同じくらい。同じ高さの目線で、ツバサがじつと穂乃果を見つめている。

恥ずかしくなつて目を伏せた。

「だ、大丈夫ですけど」

「よかった。きつともうしばらく会えないし、もう少し一緒にいたいわ」

その台詞に、穂乃果は奇妙な違和感を覚えた。

けれど、その時は理由がわからなかった。

唐突にツバサが穂乃果の右手を握ったから、あらゆる考えが飛んでしまった。

「行きましょう」

何事もなかったように、穂乃果の手を握ったまま歩き出す。

頭の中が真っ白になった。

確かに人通りが多いし、女の子同士で手を繋いで歩くことはある。

けれど、ツバサとはまだ会って2回目だし、そんな仲ではない。そういう仲になりた  
いかと言われたら、ツバサは美人だし、可愛いし、明るいし、面白いし、カリスマだし、  
なりたくないわけではない。

いや、そもそも「そういう仲」とは何か。友達だろうか。しかし、友達が手を繋いで  
歩くだろうか。

先ほどの違和感のはつきりとわかった。

『もう少し一緒にいたい』

行きたい店があるとか、したいことがあるとか、話したいとかではない。ただ、一緒  
にいたい。

穂乃果は顔が火照るのを感じた。

いや、勘違いだ。全部自分の勘違いだ。

ツバサが自分に、そんなに執着する理由がない。

あるいはこれが罠なのか？ これこそが今日穂乃果を誘った目的なのか？ 何のた  
めに？ これが何をもちたらすのか……。

「面白い顔してる。どうしたの？」

からかうようなツバサの声。

「い、いえ……」

平静を装つても、動揺は隠しきれない。

人混みの中を手を繋いだまま歩く。好奇の目で見て行く人もあるが、それを気にする余裕はない。

少しずつ人がまばらになり、やがて大きな公園が見えてきた。

ツバサはずっと、他愛もないことを喋り続けている。

穂乃果がこんなにも鼓動を速くして緊張しているのに、ツバサはずっと平然としている。ずるい。

公園に入ると、人影もすっかり少なくなつて、寂しい雰囲気に合わせてようにツバサも口を閉ざした。

微かに冷気を帯びた風の中、繋いだ手だけが異様に熱い。

穂乃果はじつとツバサの横顔を見つめる。その内、あることに気が付いた。

歩き始めてから一度も、ツバサは穂乃果の目を見ようとしなない。あれだけずっと見つめていたのに、まるで目を合わせるのが怖いように。

手が熱い。

果たして緊張しているのは自分だけなのか。ツバサが喋り続けていたのは、余裕だったからか？

疑問が頭をもたげる。

「ねえ、ツバサさん」

公園の小さな池の前で足を止めて、手を離して正面からツバサを見る。

ツバサも真っ直ぐ見つめ返した。

「今日はどうして私を誘ってくれたんですか？　すごく楽しかったけど、目的がわかりません」

単刀直入に切り出した。

元々考えるのは得意ではない。

この空間、聞くなら今しかないし、穂乃果にそれを言わせるために、ツバサはここに来たようにも思える。

「会ってお話があっただけ。それが目的で、それ以上の何もないわ」

「どうしてですか？　どうしてあの綺羅ツバサさんが、私なんかと」

初めて、ツバサが動揺を見せた。

瞳を伏せ、落ち着かないように指を動かした後、意を決したように大きく息を吐いて顔を上げた。

「それは、私が、sの高坂穂乃果のファンだからよ」

「なっ……!」

穂乃果がひるむ。

それは予想外の答えだった。

もしも本当なら、確かに初めてのメールから今日までの、ツバサのすべての言動に合点がいく。

「で、でも、ツバサさんは全国一位のトップアイドルで、すごくたくさんファンがいて、すごい人です。私なんて……」

「関係ないわ。たとえ10万人のファンが私を好きでも、私は穂乃果ちゃん、あなたのファンなの。初めて見た時からずっと」

結局ほんの一瞬だった。穂乃果がツバサから主導権を奪えたのは。

一歩近付いて、ツバサは再び穂乃果の手を取った。

「さっき言った通りよ。あなたにはない魅力をたくさん持っている。ずっと会いたいと思ってた。私も今日は楽しかった。穂乃果ちゃんのことをいっぱい知ることができて、すごく嬉しかった」

「わ、私もです……」

あまりの展開に混乱をきたす穂乃果に、ツバサがさらに歩み寄る。

吐息がかかりそうな距離。ツバサの甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「あなたとお友達になりたい」

「はい……」

「今日のこと、誰にも言っていない？ 誰にも言わない？」

「はい」

「よかった。ありがとう」

軽く手を引かれ、ひんやりとした柔らかな感触が唇に触れた。

目の前に、まぶたを閉じたツバサの顔があつて、鼻息がくすぐったい。

頭がくらくらした。

信じ難いが、ファンであるのはわかった。ファンだから友達になりたいのもわかった。

それが、どうしてキスに繋がるのか、まるでわからない。

硬直する穂乃果を弄ぶように、10秒くらい口づけをして、ツバサは顔を離れた。

「誰にも言わないでね、穂乃果ちゃん」

そう言つて笑つたツバサの頬は、見てわかるほど紅潮していた。

「は、はい」

それから後のことはよく覚えていない。



軽くハグをされた気がしたが、長い時間だったようにも思う。

気が付いたら街の中に戻っていて、駅でツバサが手を振っていた。

ぼんやりとしたまま、自室のベッドで今日のことを思い返す。

穂乃果のことを「穂乃果ちゃん」と呼ぶのは、二人の時だけだと言っていた。

あれも布石だった。穂乃果のために言ったのではない。

あのやり手のトップアイドルは、恐らく次に会う時は、何事もなかったように、しれつと「お互いに頑張りましょう、高坂さん」などと言うのだろう。

本当にずるい。

スマホを手にした。

ツバサからのメールはない。

もうわかった。きつと今日精一杯の勇気を出して、考えに考えた経路を完璧に辿れたことに満足して、後から押し寄せてきた緊張にドキドキしているのだ。

手に取るようにわかる。今ならツバサのことが理解できる。

『ライブでは動揺しないでね』

一言だけ送ってみると、待っていたかのようにすぐに返信があった。

『こっちのセリフね。私は動揺なんてしてないわ』

『手が震えてた』

『バカ』  
思わず意地悪な笑みを浮かべて送ると、今度は少し間があつてからこう返ってきた。

それで穂乃果は満足した。

翻弄され続けた今日一日を、形勢逆転で締め括った満足感。

『おやすみ、ツバサちゃん。今日はありがとう』

『こちらこそ。おやすみ、穂乃果ちゃん』

ライブまで後1週間。

自分の熱狂的なファンのためにも、最高のパフォーマンスをしたいと思う。

— 完 —